

# ウミウのトリ

林 博子

## プロローグ

夏の終わりの風が、吹いている。  
わたりの季節がやってきた。

ウミウのトリは、両親にはさまれて、飛び立つのを今か今かと待っていた。  
嬉しくって、じっとしていられなかった。

「おちつきなさい。風が読めませんよ」  
母さんから、何度も同じ注意を受けていた。

父さんは、黒にちかい緑色の羽をきちんとたたみ、首筋を伸ばし、空を見上げている。

「さあ、出発よ。群からはなれないで」

母さんの声にトリはあわてて羽をひろげた。風に乗ったのだろうか。そのまま舞い上がった。  
五十羽ほどのウミウの群が、族長を先頭にV字型の列になって、南へと進んだ。

1

ウミウの群は、海岸ぞいの小さな岩礁で、羽を休めた。  
トリがとまっている岩の上まで、波が押し寄せ、くだけ散っている。

波しぶきが、ずっと消えるとき、魚が見えたりした。

「さあ、トリー、魚をとっておいで。食べておかないと、わたりは続けられないんだよ」  
父さんのきびしい声がする。

トリーは、体がふるえた。水にもぐるのも魚をとるのも、苦手だった。

「ウミウの体は、もぐるのに向いているのよ。それに、足の指、四本の間、水かきもあるんだから。こわくはないわ」

母さんは、優しくはげましてくれた。

トリーは、思い切って海にとびこんだ。

ドビヤーンと水しぶきがあがる。その水音におどろいたのだろうか。イワシの群が、さつと散っていく。

海藻の間にイワシが見える。尾羽でカジをとり、イワシに近づいた。

そのとき、羽に何かがからんだ。とりはずそうと首をまげる。糸のようなものが、くるくると羽にまきついているのが見えた。トリーは、そのまま海底に、たたきつけられた。

「トリー、トリー、どこにいるんだ」

「もう、出発の時間よ。はやく、あがっていらつしやい」

「父さん、母さん。ぼくは、ここにいるよ。動けないんだ。おいていかないで」

両親の呼び声に答えても、言葉はブクブクと泡になって、波の音に消されていく。動いたびに、羽がきつくしめつけられ、ギリギリと痛む。

「グルーグルー、トリー、トリー」

鳴きながら遠ざかっていく両親の声を、波が運んできた。

（もうだめだ。群にも、父さんや母さんにも、おいていかれてしまった。ああ、ぼくは、このまま死んでしまうのだろうか）

トリーは、動く元気もなかった。声もでない。涙さえもなかった。

（言いつけをまもって、わたりに出る前に、もつと、もぐる練習をしておけば、よかった。母さんのノドの中にクチバシをつつこめば、魚がもらえらると思っていたんだから）

トリーが、甘ったれていた自分を責めたときだった。大波が、砂ごとトリーを巻き上げた。

2

ほほをなでる風に、トリーは目をさました。

「ここは、どこだろう」

トリーは、あたりを見わたした。湿った砂が、貝の模様を描いている。

ドドドドという波の音。光がはねている。風がスキップをしている。

「あ、ウミウの幼鳥だ。釣り糸が羽にからまっている」

少年の声が出た。

トリーは、ギクツとして、体をふるわせた。

「だいじょうぶだよ、動かないで」

少年は、かがんで、それをはずしてくれた。

「よしよし、羽が一本折れているだけだ。満ち潮で、浜にうちあげられたんだね。だけど、釣り糸を海に捨てていく人間がいるなんて。許せないよ」

少年は、顔を真っ赤にして怒っている。

「さっき、ウミウの親鳥が走りまわっていたけれど、きっと君を探していたんだね。ぼくも、ママはいないし、パパが仕事で外国に行ってしまった。おいていかれるって、やりきれないよな」

トリーは、少年の声がふるえているのに気づき、彼を見上げた。目に、しずくが光っている。

「おたがい親が帰ってくるまで、がんばろうな。生きるんだよ。オレも負けない」

少年は、そっとトリーの頭をなでて、立ち上がった。トリーは彼を見上げ、グルーグルと鳴いた。少年と、はなれなくなかった。

「鳴くなよ。オレだって君が心配だよ。だけど、つれていられないんだ。寄宿舎にいるんだから。それに、野鳥は飼えないんだよ」

少年は、そっとトリーをおき、くるつと後ろを向いて走りさった。

3

真向かいの山に、太陽が沈んだ。

海は、血を流したような色に変わっていた。

(これからどうしたらいいのだろう。群においていかれてしまうなんて。父さんや母さんには、もう会えないだろうか)

トリーは、群と別れた岩礁に、とぼとぼ引き返した。

両親がしてくれたことを思い出しながら、海草や枯れ枝をクチバシでくわえ、岩のくぼみにした。カニが岩の間に、走りこんだのを見つけ、つまんで食べた。フナムシも口にいった。お腹がいっぱいになると、岩のくぼみで、横になった。

ゆっくり赤い月が昇ってくる。漁り火が沖にきらめき、潮騒の音が、聞こえる。

両親も仲間もない。トリーだけだった。

(父さん、母さん、どこに行ってしまったの)

トリーは、海草で目をこすった。

波の音で目をさました。

見ると、足元まで海水が来ている。

岩のくぼみにしいた海草や枯れ枝の寝床も、ぐしょぐしょに、ぬれていた。

大きな岩に移らなければと思った。

しらしらと東の空が、明るくなりはじめた。陸地は、まだ暗いのに、空と海のぶつかりあうあたりだけが、紅葉をしきつめたように見える。

トリーは、羽を動かしてみた。痛みは、少し残っていたが、飛べそうだった。

いそいで巣場所を探さないと危険だ。この岩では、嵐がくれば海にひきずりこまれそうだと、トリーは思った。

ウミウは、海にもぐることはできるけれど、長い時間は無理だった。それに、ほかの水鳥にくらべ、水をはじく油分が少ないから、羽は乾いているほうがよい。

トリーは、父さんがしていたように、岩の上に立ち、風を計った。体ごと吹き上げられるよう

な風を感じる。羽を大きく開いた。体がさつと浮いた。羽を上下に動かす。

太陽に向かって飛んだ。

海面を見おろすと、カブトのような形をした大岩が見える。

岩礁のある海岸からも、そんなに遠くではなかった。父さんや母さんに会うには、群と別れた海岸の近くにいななければいけない。ここしかない、トリーは思った。

カブト岩に舞いおりた。くぼみを探す。てっぺんの近くに休めそうな場所があった。

小枝と海草を拾い、くぼみにしきつめ、ベッドにした。

いくら波が高くても、この大岩の上までは、押し寄せてこないだろうと思った。

しばらく働いたせいか、お腹がすいた。

トリーは、思い切つて岩の下まで舞いおりた。とびこもつと海の中を見る。白い牙を持った青いおばけが、両手をひろげ、トリーをつかまえようとしているようだった。ふるえて、クチバシがカチカチ鳴った。傷ついた羽が、痛みをます。そのとき、トリーは、助けてくれた少年の言葉を思い出した。

「親鳥が帰ってくるまで、がんばるんだよ。生きるんだよ」

トリーは、息を吸い込んだ。そして、思い切つて、海にとびこんだ。アジの群が見える。逃げまわるアジを、カギ状になったクチバシでとらえ、さつと海面にあがった。

アジは、うまかった。

昨日は、イソガニとフナムシだけの食事だったから、活きのよい魚は、ごちそうだった。

木枯らしが吹きはじめた。風が、真つ赤に染まつた紅葉や桜の葉を散らしていく。堤防の向こうに見える林も山も、色づいていた。

トリーは、冬を越すために、浜に出かけ、流れ着いた小枝や乾いた海草を、巣に持ち帰った。  
(あの少年に会えるといいな)

いつだって、トリーは浜の上空にくると、少年を探すが、見かけなかった。

トリーは、少しずつカブト岩の生活に慣れ、一日に何回か漁に出た。

その朝も、ムツを見つけ、海にとびこもつとしたときだった。空を高く飛んでいた褐色の鳥が、急降下してきた。そして、足でムツをつかみ、飛び上がった。カギ状に曲がつた足のツメは、十本の釣り針みたくに見える。ごま塩頭で、目のまわりから肩にかけて真つ黒な線がある。ミサゴだった。トビと同じぐらいの大きさで、タカの仲間だ。

トリーは、ふるえあがった。あの足のツメで、ノドを、かき切られたら、生きていられないと思った。お腹をすかせたまま、その日一日巣にこもっていた。

次の朝早く、トリーは、カブト岩のてっぺんに立ち、空を見上げた。ミサゴは見えない。(漁をするなら今だ)

トリーが、海面をのぞきこんだときだった。

「ジュジュジュ」

鋭い警戒音が聞こえた。見上げると、二羽のミサゴだった。トリーの頭の上をまわりはじめる。そして、そのうちの二羽が、トリーに向かってきた。鋭い足のツメが、陽にあたってキラツと光

る。

トリーは、とっさに海にとびこんだ。ミサゴの釣り針のようなツメが、羽をかすった。トリーは、羽をギョツツとしめ、ミサゴのツメからのがれた。タッチの差だった。

ミサゴの影が、海面から消えるまで、トリーは、もぐり続けた。

ミサゴにおそわれてから、トリーは、カブト岩の上で、空に向かって羽をひるげ、テリトリーを主張し続けた。

鋭いツメを持つミサゴでも、負けたくなかった。それに、ミサゴは、ウミウとちがって、海にもぐれないことも、学んだ。

トリーは、ミサゴが上空を旋回するより先に、漁をするようにした。

秋から冬にかけての魚は、脂がのっけていてうまい。特に、キンメダイやワラサの味は、最高だった。

トリーは、アナゴの幼魚を追って、海岸の近くまできた。ピチピチはねる幼魚を、口にふくむと、岩礁にあがり、羽を乾かしながら、ゆっくりゆっくり食べていた。

すると、一人の少年が、堤防によりかかって、泣いているのが見えた。トリーを助けてくれた少年だった。トリーは、胸がギョツツと痛んだ。父さんと別れて暮らしていると聞いていた。何かあったのだろうか。なくさめてやりたかった。ううん、お礼を言いたかった。トリーが生きてい



ることを、知ってほしかった。

トリーは、羽を大きくひろげ、少年に合図をした。

「グルーグルー、命を助けてくれて、ありがとう。何かあったんですか。グルーグルー」

グルーグルーという呼びかけが、届いたのだろうか。少年はトリーに気づいて、波打ち際まで走ってきた。

「生きていたんだね。よかった、よかった。泣いているのを見られちゃったね。パパが行方不明になってしまったんだ。アフガニスタンという遠い国に、写真を撮りにいっていたんだけれど。でも、君が助かったんだから、パパも生きていてくれるよね」

叫びながら、大きく手をふっている。

トリーは、胸がキューンとなった。

もし、できたら、少年を背中に乗せ、アフガニスタンまで飛んでいってやりたかった。

6

トリーは、寒さで目をさました。白く冷たい花びらが、舞っていると思った。

花びらは、海草のベッドにも岩にも、つもっている。

トリーが産まれて初めて見た雪だった。雪は、風の音も波の音も消し去って、降っていた。凍えそうだった。羽もすばやく動かせない。足の先がじんじん冷たくなってくる。このまま、雪に閉じ込められてしまうのだろうか。トリーは、ぶるつと体をふるわせ、海草の布団をかぶった。

(父さんや母さんも、それに、あの少年も、この雪を見ているだろうか)

トリーは、暗くひろがる海に降る雪を、ながめていた。

雪がやんだ。

砂浜にも岩の上にも、雪がつもっていたが、海だけは銀色がかった藍色をしていた。

トリーは、少年が浜にいた時刻を見計らって、岩礁まで飛んだ。浜には、だれもいなかった。道路も封鎖されているのだろうか。車の音も聞こえない。カラスやトビの鳴き声さえしなかった。岩の上の雪を羽ではらって、海草をつまんで食べたときだった。

「おおい、ウミウ、すごい雪だったな。食べ物はあるか」

あの少年の呼び声があった。トリーは、あたりを見わたした。堤防の上に、少年が立っている。転んだのだろうか。雪ダルマみたいに、真っ白だった。

「グルーグルー。だいじょうぶですよ」

トリーは、大きく羽をふった。

「アフガニスタンも、雪が降るんだって。パパ、雪に閉じ込められてしまったのかな。まだ、連絡がつかないんだよ」

少年の声が、ちよつと湿った。

「グルーグルー、ぼくだって生きていますから、お父さんだって、元気ですよ」

トリーは、大声で鳴き続けた。

東風が吹き、春になった。旅鳥が、磯で羽を休めはじめた。

トリーは、夜明け、海岸ぞいの自動車道路の外灯が、まだ灯っている頃から、カプト岩の上に立ち、南の空をながめ、ウミウの群を待つようになった。

きつと、父さんも母さんも、トリーを見つけてくれると思っていた。

その日、朝焼けが消えると、空はすっかり灰色に変わり、風が暴れはじめた。

うねる波の上を、羽がボロボロになったオオミズナギドリが、風にあおられながら飛んでくるのが見えた。よろよろしている。今にも、波にのまれそうだった。

「グルーグルー、おおい、だいじょうぶか。ガンバレ、もう少しだ」

トリーの声を、風と海鳴りの音が、奪っていく。

トリーは、オオミズナギドリを助けに飛んでいこうとして、羽をひろげた。横なぐりの風が、トリーを押し倒した。やっと立ち上がり、海面を見ると、大波が、オオミズナギドリを飲み込んでいくところだった。

トリーは、オオミズナギドリが、海に沈んでから、風や波の音さえ、こわくなった。

（母さんや父さんも、風に羽をちぎられて、波に飲み込まれてしまったら、どうしたらいいんだろう）

心配の種がふくらんでいく。

（父さんや母さんも、海からあがれなかったぼくを、死んだと思ったのだろう）

トリーは、ここまで考え、やっと両親の気持ちがわかった。辛かったらと思う。

トリーは、少年の声を聞きたくなくなった。自分が独りぼつちでないことを知りたかった。

嵐がおさまると、少年が浜に来る時間に、岩礁まで飛んだ。風はおさまっていたが、波は、まだ高かった。防波堤近くまで、波が押し寄せている。

パトカーや救急車の音が、港の方に向かっていく。

岩も、波にかくれている。

引き返すより仕方がないと、トリーが思ったときだった。

堤防の上に、少年がかけあがってくるのが見えた。

「すごい嵐だったね。漁船が、てんぷくしたんだよ。漁師のおじいさんが、見つからないんだって」

「グルーグルー、堤防の上はあぶないですよ」

トリーは、はらはらして叫んだ。

「君が心配でさ。ぶじでよかった。明日も、また会おうね」

少年は、手をふって帰っていった。

## エピローグ

今日も、トリーは、少年がくるのを、岩礁の上で待っていた。

海岸ぞいの道の桜が、散りはじめている。

桜の花びらが風に乗ってきて、海面を踊りだした。

トリーがクチバシで花びらをすくって、「群がくる、こない」と、うらなっていると、少年が浜にかけてくるのが見えた。足がはずんでいる。

「おい、パパの居場所がわかったんだ。ぶじだったよ。それにね、ウミウの群を見たって、漁師のおじさんが言ってたよ。君の両親も、戻ってくるよ」

「グルーグルー。よかったね、よかったね」

トリーは、岩礁から飛び立って、少年のまわりを何回も何回もまわった。嬉しかった。きつと自分の両親もこの浜に戻ってくると思った。

トリーと少年のまわりを、桜の花びらが、降りしきっていた。

(おわり)